



平成 26 年度 一般国道 246 号建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

かみかすや いしくらなかいせき 上粕屋・石倉中遺跡

主催 公益財団法人かながわ考古学財団
共催 伊勢原市教育委員会

縄文時代の敷石住居を発見

上粕屋・石倉中遺跡の発掘調査

伊勢原市上粕屋に所在する上粕屋・石倉中遺跡では、一般国道 246 号(厚木秦野道路)建設に伴う発掘調査では、江戸時代から縄文時代にいたる遺構や遺物が発見されました。

現在実施している調査区では、縄文時代後期の集落が発見されています。特に敷石住居跡と呼ばれる床面に礫を敷き詰めた遺構が複数確認されました。

これら敷石住居跡は、神奈川県では西部域で多く発見される特徴的な遺構ですが、なぜ礫を敷き詰めるのか不明な点もあります。これら縄文時代の遺構群を今回の見学会でご紹介します。



三ノ宮比々多神社に移築復元された三ノ宮・下谷戸遺跡の敷石住居跡

参考資料① 敷石住居跡の発見

大正 14 年、後に高ヶ坂石器時代遺跡(八幡平遺跡)として知られる南多摩郡南村高ヶ坂(現町田市)では、床に石を敷きつめた住居跡が複数発見されました。石を敷いた状況から「敷石住居跡」と呼ばれました。住居の出入り口が突出した形状から、「柄鏡形住居跡」とも呼ばれます。三ノ宮・下谷戸遺跡でも同様のものが発見されています。



イラスト 井野正人

敷石住居跡の想像復元図

参考資料③ 敷石住居跡の上屋復元想像図

住居跡の上屋は、発掘調査で発見される地下構造から得られる情報では限界があり、建築学や民族学なども使って復元しています。敷石住居跡が使用されていた時には、柱が建てられ、屋根がかけられていました。柱は壁沿いに建てられ、壁と一体化していたものと考えられていますが、柱の外側にも住居空間が広がっていたと想定する考え方もあります。



※赤帯は、今回の調査で発見された遺構や遺物のおおよその時期を示しています。
※調査の内容は発掘時点であり、出土品整理などにおいて、評価を変える場合があります。



相模原市緑区 川尻中村遺跡の敷石住居跡(縄文中期末葉)

参考資料② 住居跡の構造

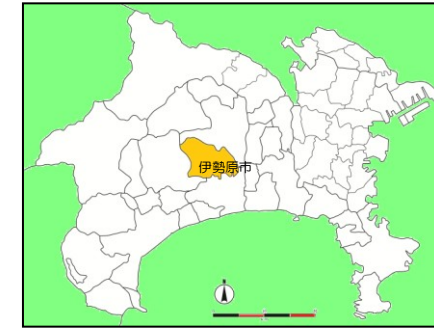
相模原市緑区の川尻中村遺跡では、中期末葉の住居跡が発見されています。炉は、住居主体部の中心から少し奥壁に寄り、その反対側に張り出し部が伸びます。この住居では、敷石部分を取り囲むよう、外側に柱穴が複数確認されています。このことから、上屋を支える柱によって、敷石の周りもひとまわり大きく空間が確保されていたことが考えられます。本来の住居は、敷石部分よりも広い範囲を想定していくことも必要です。



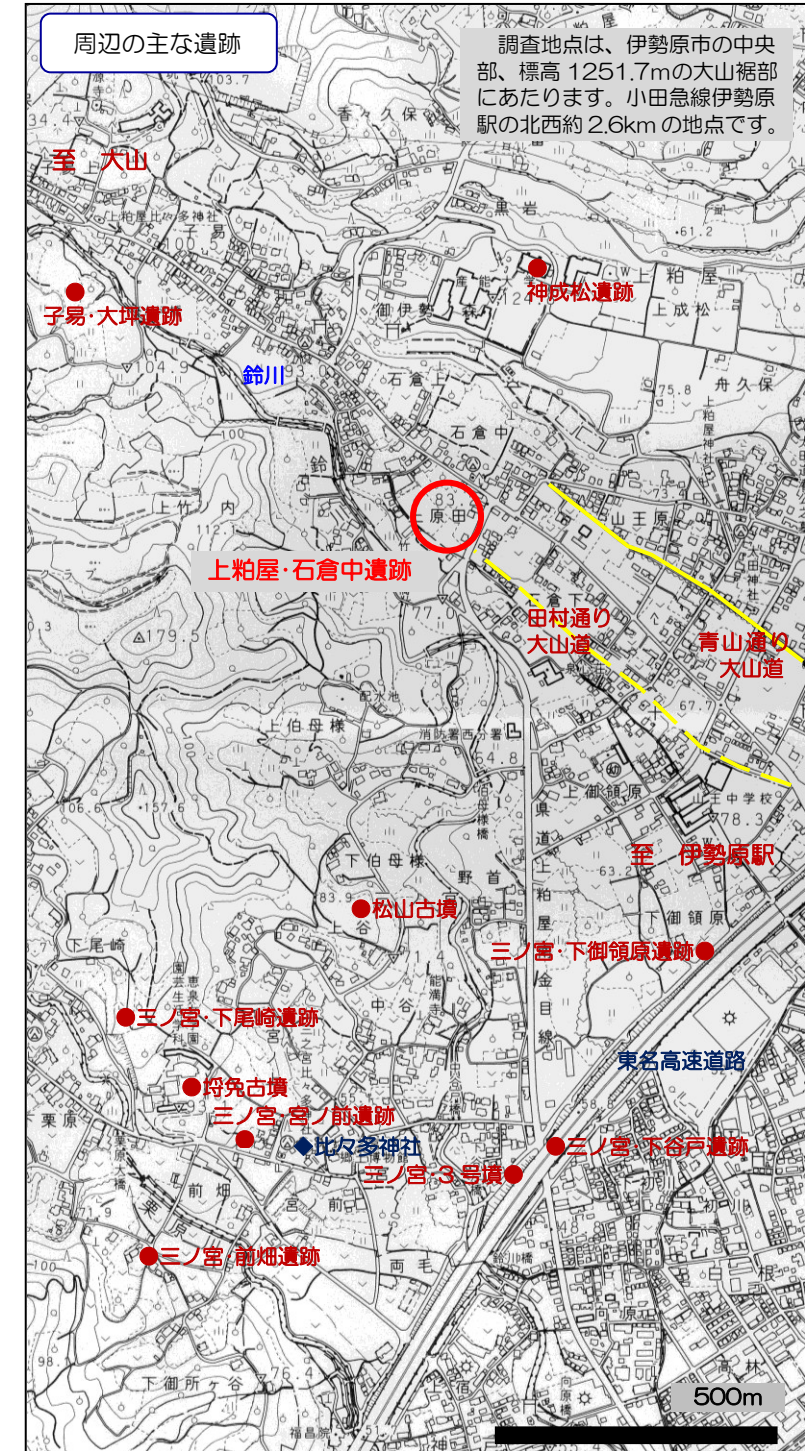
子易・大坪遺跡の敷石住居跡

参考資料④ 子易・大坪遺跡の敷石住居跡

鈴川の上流にあたる子易・大坪遺跡では、縄文時代後期住居跡 8 基や配石など、多数の遺構が発見されています。鈴川流域には三ノ宮・宮ノ前遺跡などをはじめ多くの集落があり、鈴川から供給される豊富な石材を使って、敷石住居跡が多くつくられていたことがわかります。



「地域の特性を活かした
史跡等総合活用推進事業」



周辺の主な遺跡

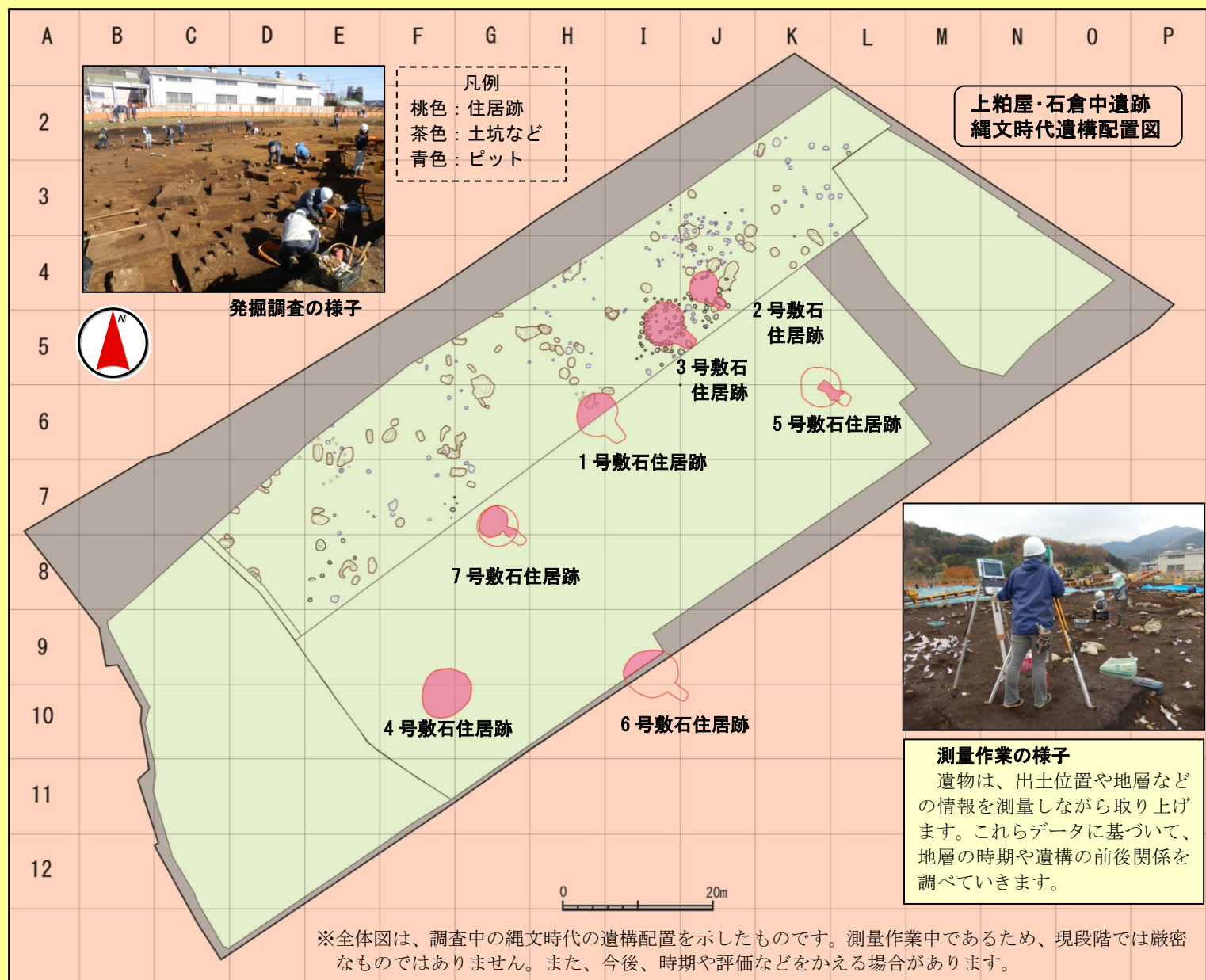
調査地点は、伊勢原市の中央部、標高 1251.7mの大山裾部にあたります。小田急線伊勢原駅の北西約 2.6kmの地点です。



平成 26 年度 一般国道 246 号建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
かみかすや いしくらなかいせき
上粕屋・石倉中遺跡見学会資料



2014 年 12 月 20 日
主催 公益財団法人かながわ考古学財団
共催 伊勢原市教育委員会
〒232-0033 横浜市内南区中村町 3-191-1
Tel.045-252-8689 <http://kaf.or.jp>



※全体図は、調査中の縄文時代の遺構配置を示したものです。測量作業中であるため、現段階では厳密なものではありません。また、今後、時期や評価などをかえる場合があります。

上粕屋・石倉中遺跡の縄文時代遺構配置図

遺跡は鈴川左岸に形成された標高 83mの台地上に所在します。起伏が僅かな尾根が北東から南西に延び、それに沿った形で遺構が作られています。これまでに敷石住居 8、配石 2、集石 12、炉跡 9、埋甕 5、土器集中 3、土坑 145、ピット 638 基が発見されています。集落の全体は、調査区外にも及んでいるため明らかではありませんが、住居数は 10 基以上に及ぶと考えられます。住居の軸線を見ると北西(大山)方向に並ぶよう配置しているものが主体で、僅かな尾根の地形を利用して居住しているものと思われます。住居の周囲には、調理施設である集石、お墓と考えられる土坑や埋甕、火を焚き焼土が散らばる炉跡などがあります。それらも含めて年代毎の遺構の移り変わりを捉えて、縄文の村の様子を考えていく必要があります。



7号敷石住居跡の柱穴(南から)

敷石の外側にも掘り込みの広がりが見られるものです。住居主体部の敷石は、六角形に近い形態です。



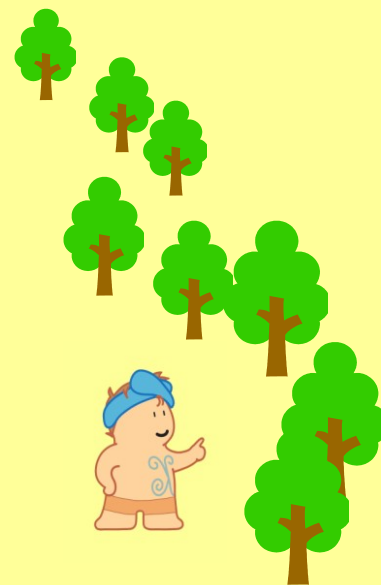
5号敷石住居跡の柱穴(南東から)

住居の一部のみに敷石が残るものです。住居奥壁の縁石と張り出し部に敷石が見られます。柱穴列は確認の段階ですが複数認められます。



4号敷石住居跡の柱穴(西から)

敷石は、古墳の周溝により失われている部分が多く認められますが、壁の一部と壁際の敷石は、比較的良好に残っています。



測量作業の様子

遺物は、出土位置や地層などの情報を測量しながら取り上げます。これらデータに基づいて、地層の時期や遺構の前後関係を調べていきます。



今回の調査では、主に赤字で示した部分の遺構や遺物が発見されています。

地層の堆積

遺跡及びその周辺では、堆積の良好な所で、地表面から深さ 2m で関東ローム層が確認できます。場所によっては、後世の土地利用による削平や流出などによって、失われている部分も多くあります。発掘調査では、地層や火山灰の観察が時代や年代を探る大きな手がかりになります。



3号敷石住居跡の床面(南東から)

床面の礫は、後世の攪乱などにより失われている部分が多く認められず。住居中央付近と張り出し部など部分的に礫が良好に残存しています。



3号敷石住居跡の床面(北から)

敷石の礫は、径 30~50cm 前後の扁平な河原石が多く用いられています。石材は、鈴川流域に多く見られる凝灰岩が主体です。



3号敷石住居跡の柱穴(南東から)

敷石の下部では、柱穴が列状に並んでいます。中央部の炉が 2 箇所あること、柱穴列も複数認められることから住居の建て替えが行われていたと考えられます。



3号敷石住居跡の遺物出土状況

床面を覆う土からは、土器や石器などの出土遺物が多量に出土しています。その多くは住居跡が使われなくなってから、窪地となった住居に捨てられたものと考えられます。



6号敷石住居跡の柱穴(北から)

敷石の大半は調査区外へ伸び、全体は不明です。床面には、大小の礫を組み合わせて密に敷き詰めています。



(写真上) 76号土坑の遺物出土状況

径 120 cm・深さ約 30 cm の土坑からは、深鉢形土器と礫がまとまって出土しています。形態や出土遺物などからお墓であった可能性が考えられます。



(写真左) 土器集中の遺物出土状況

土器集中では土器の破片が多量にまとまって出土しています。その中央では、深鉢形土器が埋められていました。